

中国語の統語機能について—日本語と中国語の比較を通して—

川 本 栄三郎

§0 はじめに

この小論は日本人が中国語を、中国人が日本語を学習するにはどうしたら理解し覚えやすいかという、外国語の教授と学習の実践的な方法論を考案しようとする立場から記述したものである。そのためにはそれぞれの言語に固有な言語体系(品詞分類や文法)から入るのではなく、人間は現実の生活のなかで現実をどのように認知しそれを言語表現しているのかという、言語のもっとも基本的なところからアプローチしようとするものである。

人間は行為・動作を行わなければ、生活が現実化されない。行為・動作、あるいは行為・動作が行われる(行われた、行われている)ことをイベント(出来事)とよぶ。この行為・動作はどの言語においても一番大事であり、それは品詞分類上端的に動意詞という。生活が現実化するときはその行為・動作の対象となるものがオブジェクト(もの、物、者、場、観念物)であり、それは品詞分類上端的に名物詞という。行為・動作は、抽象的な一般的な行為・動作として現実化(現出)するものではない。人間はひとつの行為・動作のなかに多くの現実を認知しているのである。例えば「ひとが歩く」という抽象的な現象として生活の現実には存在しない。個別・具体的に、「だれが歩く」「どこを歩く」「だれと歩く」「なにをもって歩く」「何を着て歩く」「どんな気持ちで歩く」「どのような足取りで歩く」(歩いている、歩いた)かを一瞬にしてみとる(認知する)。この小論では特にひとつの行為・動作がどのように(どのような有様・有り方・様態・様相・状況・状態として)認知され、それが言語にどのように表現されているかを中心に論ずることにする。

§1 意思(意志)動詞とそれ以外の非意思(意志)動詞—判断意識動詞、知覚認識動詞、存在状況動詞、心理状況動詞とは何か

日本語をおぼえるときに、いや、逆に中国語をおぼえるときにも、まず徹底的に行為・動作を表す、しかも日常生活のなかで使われる動詞を丸暗記すること。覚えるときに、単語として覚えるのではなく、短い文でよいから、一文にして、たとえば、「看」は「我看電視」(私はテレビを見る)という一文にして覚えること。人間の感覚・知覚のうち、現実(対象世界)を認知するのは視覚認知に8割かた依存している。なかでも行為・動作は実際目の前に具現してもらわないと、それがどのような行為・動作なのか理解できない。つまり行為・動作として現れる動詞は感覚・知覚の対象として認知される機会があまりに少ないので、一番理解しにくい、覚えにくい単語あるいは身につけにくい単語であると言える。だから辞書の意味で観念的に理解するだけであれば、身につかない単語として終わってしまうが、身体感覚に訴えて覚えると忘れない覚えやすい単語となる。逆に動詞でも身体感覚を伴わない知覚認識動詞は覚えにくいということになる。その点、物体として現れる名詞(抽象名詞は除く)は理解しやすいし、覚えやすいが忘れやすい単語でもある。

認知言語学的に考えると、ほとんどすべての動詞は「歩く」「書く」「話す」「会話する」「する」などのような意思動詞であるが、意思動詞の周辺にある数少ない動詞として「・・・を感じる」「・・・と思う・考える」「見える、聞こえる、においがする」などのような知覚認識動詞がある。知覚認識動詞には外に判断意識の「・・・である（中国語の是）」、半意識動詞の「・・・みたいである、・・・のような気がする（中国語の好像、似呼など）」がある。主語に意思が働いていない動詞として、外に存在状況動詞がある。これには「ある」「いる」の存在動詞、「美しい」「おいしい」などの状況動詞、喜怒哀楽の感情を表す「悲しい」「うれしい」などの心理状況動詞がある。これらの知覚認識動詞、判断動詞、半意識動詞、存在動詞、状況動詞は、話し手または主語の意思が働いていない非意思動詞である。すなわち中国語の「愉快（たのしい）」「高興（うれしい）」も「好吃（おいしい）」「美麗（きれいな）」もみんな動詞とみなす。

「美しくなる」の構造は「美しい」という状況動詞（日本語の形容詞、形容動詞）と「なる」という変化態の動詞が連用したものとしてとらえる。「美しい・なる」から「うつくしくなる」と音変化したものである。

どの言語の学習にとっても単語を覚えることが基本であり最低必須の重要事項であるが、特に日本語で難しいのは動詞や形容詞が未然形、仮定形、終止形、連体形、命令形などの意味機能の違いによって活用形も複雑に違うことである。中国人が日本語を学習するにあたって、動詞は活用の変化を考慮しないこと、すべて終止形（基本形）で考えることにしたほうが覚えやすい。

どの言語もほとんどすべての動詞は目的語をとる。中国語の場合、目的語は動詞の後にくる。中国語の目的語には、「我去学校（私は学校に行く）」の場所目的、「我叫山田太郎（私は山田太郎といいます）」の呼称目的、「我看電視（私はテレビを見る）」「我吃餃子（私は餃子を食べる）」の処置対象目的の三つに分類される。中国語は動詞優先の、いわゆるSVO型の言語である。日本語は動詞が最後に来る、いわゆるSOV型の言語である。

§2 判断・断定態とは何か—「是」判断詞は何千年来変わらない代詞である

- 1あなたは何を食べる（か） 你吃什么
- 2あなたは何を食べるの（である）か 你是吃什么（的）
- 3あなたは何を食べるのですか 你是吃什么呢
- 4あなたは何を食べますか 您吃什么呢
- 5あなたは何を（が）食べたいか 你想吃什么
- 6あなたは何を（が）食べたい（の）ですか 你是想吃什么（的）
- 7あなたは中国人です 你是中国人
- 8あなたは中国人ですよ 你是中国人吧
- 9彼は学生です（である） 他是学生
- 10彼は学生なのです（である） 他是学生的
- 11あれはたいへん（大変、非常に、とても）安い 那个很便宜
- 12あれはたいへん安いのである 那个很是便宜（的）

中国語は非常に言語の経済的合理性が強く、疑問詞「何（なに）」があるときには重複する疑問助詞「か」は省略できる。日本語の場合、省略するときにはイントネーションを伴う。

例2、6には文末の語気詞「的」があれば自然であるが、「是」の意味機能を単純に理解してもらうために「的」を省略した。日本語の「です」「である」（中国語では「是」）は動詞の終止形（連体形）の後に来て、判断態を表す。例9「他是学生（彼は学生です）」の「是」はもとも

と後に来る「学生」の代名詞「これ」である。代名詞が先行して「彼はそれだ」と言って、相手の注意をひきつけておいてから「それは学生だ」と強調すると、判断態の認知が作用することになる。

「(の)です」は「(の)である」の丁寧態である。「です」「である」の判断態に「の」がつくと、もっと強い断定態となり、それは中国語では例10のように、文末の「的」(中国語では語気詞)で表現される。「ます」は動詞の連用形に続き丁寧態を表す。日本語の助詞「は」「を」に注意すること。

例7のように「あなたは中国人です」と、一方的に決め付けると聞き手(相手)に失礼あるいは不愉快にさせると思い、例8のように、中国語では語気詞「吧」を文末に付け、日本語では終助詞「(よ)ね」を付け、「あなたは中国人ですよね」と控えめに確認することになる。

中国語(漢語)の単語(漢字)は派生して新しい意味機能をもつようになって、もともとの核になる意味を失うことはない。「是」は古代漢語の世界でも代詞であり、後から文法的に解釈されて判断詞となるのである。「是」や程度・結果補語の「得」は軽く扱われるというよりも、もともと持っている明確な確固たる意味機能が見落とされがちである。つまり程度・結果補語の「得」も軽い助詞などではなく、強力な働きをする明確な動詞である。中国語の文字(漢字)は音も意味も表す語彙文字であるから、中国語(漢語)の教授と学習には「もともとの核になる意味を失うことがない」という考え方は大切である。たとえば、例11の「很」は単なる音ではなく、明確な意味をもつ「狠」がものごとの程度の高いこと(いい方向にも悪い方向にも)を表現する場合に使われていたが、語感があまりよくないので、中性的に音だけを表す新しい漢字の「很」に書き換えられたというように解釈すればよい。

§3 発生・完了態と持続・進行態とは何か—もっとも基本的な認知能力

- 1 あなたは何を食べているか 你在吃什么(呢)
- 2 あなたは何を食べていますか 您在吃什么呢 你吃着什么呢
- 3 あなたは何を食べているところですか 您在吃什么呢 你吃着什么呢
- 4 あなたは何を食べたか 你吃了什么了
- 5 あなたは何を召し上がりましたか 您吃了什么了

持続・進行態には動詞の前に「在」がつく場合と後に「着」がつく場合があり、いずれも日本語の「・・・している」「・・・しています」「・・・しているところです」という意味である。「在」がある場合を進行態とよぶ。動詞に「着」がついた持続態は持続時相態(アスペクト)ともよび、日本語の「・・・た」に相当する発生・完了態「了」は完了時相態とよぶ。行為・動作の発生・完了態(・・・た)と持続・進行態(・・・ている)は人間の生活にとって、もっとも基本的な営為であるから、どの言語にとっても大事な認知能力(認知的カテゴリー)である。特に発生・完了態は行為・動作の終わりであると同時に始まりでもある。つまり、人間の生活は絶えず変化の中に置かれているのが現実である。変化するかしたか、またはそれが続いているかどうかを、人間は絶えず認知している。直接的な行為・動作の変化は間接的には、状況の変化でもある。状況(事がら)の発生は状況(事がら)の終わりであり、状況(事がら)の継続でもある。

特に発生・完了態「了」は、現実には「絶えず変化するもの」として認知され、きわめて頻繁に言語表現されることによって、目の前に起こった現実の変化に対して詠嘆(驚きや感慨)の気分を表す程にまで進化する。例えば、簡単な例で言えば、「太貴了(値段が高すぎるなあーよね)」のように、それはほとんど語気詞になってしまうのである。

§4 否定態とは何か—習慣・意思（意志）の否定「不」と発生・完了・持続・進行の否定「没（有）」

- 1 私は家にいる（ます） 我在家
- 2 私は家にいない（ません） 我不在家
- 3 私は家で夕食を食べる（ます） 我在家吃晚饭
- 4 私は家で夕食を食べない（ません） 我不在家吃晚饭（意志・習慣）
- 5 私は昨日家で夕食を食べなかった（食べていない） 我昨天没在家吃晚饭

「在」は存在状況動詞（「いる」）を表すが、本動詞「在」が虚化して、場所を表す前置詞（介詞）「・・・で」となる。

「・・・しない」は否定態を表し、日本語では文末に来るが、中国語ではその反対で主語のすぐ後に来る。「・・・しません」はその丁寧態である。発生・過去・完了・進行・持続の否定態は「不」ではなく、「没」であることに注意すること。「没」は「没有（ない）」の略であり、行為・動作の発生態、完了（過去）態、進行態、持続態で表される事がら、今の今まで話し手あるいは行為主体の眼前に「没有（ない—出現していない）」ということである。習慣や意思を表す行為・動作の否定態の「不」とは、同じ否定態であるけれども、話し手に認知される現実そのものの次元が違うのである。「は」「を」「に」「で」などは日本語の助詞である。

§5 観照論理態とは何か—第一次動詞として第二次動詞を支配する

- 1 あなたは毎日（まいにち）家で夕食を食べますか 您每天在家吃晚饭吗
- 2 夕食は両親（りょうしん）と家で食べなければならない（なりません）
晚饭，（我）应该在家跟父母吃晚饭

- 3 私は夕食をみんなで食べる 我跟大家吃晚饭
- 4 私は夕食をみんなと食べたい 我想跟大家吃晚饭

「・・・しなければならない」（義務態、道理）と「・・・したい」（願望態）に注意すること。

「私はみんなで晩ご飯を食べる」は「食べる」という意志あるいは習慣を表し、実際に実行に移されている現実として認知されているが、さらにこの現実が義務態「應該（・・・しなければならない）」や願望態「想（・・・したい）」で認知されると、観念的な論理上のことにすぎなくなってしまう。つまり、現実の生活においては、逆に「吃晚饭（晩ご飯を食べる）」という行為動作がなんら実現されていないことになる。これらの態の動詞は形態的には第一次動詞として後ろの第二次動詞「吃晚饭」の態（意思や習慣としての有様）を大きく変え、支配しているといえる。これらの態を観照論理態とよぶ。形態機能的には、日本語では最後に位置するが、中国語では主語のすぐ後に来る。

- 5 あなたは外食する 你在外吃饭
- 6 あなたは外食せ（しろ） 你在外吃饭
- 7 あなたは外食しなさい 你在外吃饭吧
- 8 あなたは外食して下（くだ）さい 请你在外吃饭吧
- 9 あなたは外食するな 外食してはいけない 外食してはならない
你不要在外吃饭 别在外吃饭
- 10 あなたは外食しないで下さい 请不要在外吃饭

命令態は動詞「する」の連用形「せ」（母音eを持つ）にするか、または「しろ」にする。その丁寧態は「・・・しなさい」であり、依頼態は「・・・して下（くだ）さい」となる。禁止命令

態は動詞の終止形（母音uを持つ）に助詞「な」を付ける「・・するな」の表現がもっとも容易にできる表現であるが、それはまたもっともきつい表現であり、相手を不愉快にさせるから使われることが少ない。かわりに丁寧態あるいは依頼態の「・・しないでください」という表現が使われる。「・・してはならない（なりません）」「・・してはいけない（いけません）」も禁止命令態である。

§6 発生・存在状況態とは何か—話し手や主語の意思（志）はどうなるのか

1 私は家にいる 我在家

「我」が主語であるSVO型の語順をとるが、動詞「在」には主語の意思が働いていない。「家にいる」という存在あるいは状況を表す。そもそも人間存在は場所に付着しているから、「在（ある、いる）」という存在状況動詞には、はじめから意思が働いていないのである。「有（ある、いる、もっている）」という動詞も「在」と同じく動詞自身で存在状況態表現を構成する。ただし、「有」は「在」がその後ろにとっていた場所目的語を前に出したOV型を構成する。

2 一個学生在教室里（学生は教室の中にいる）

3 教室里有一个学生（教室の中には学生がいる）

4 私には妹がいる（ある） 我有妹

5 私には鉛筆がある（私は鉛筆をもっている） 我有鉛筆

6 テーブルの上には本が置いて（置かれて）ある 桌子上放着一本書

7 彼は衣服を着ている（彼には衣服が着けられている） 他穿着衣服

8 我家来了客人 我家にお客さんが来た（話し手の意思に関係なく、突然来た）

9 (天) 下了雨 雨が降ってきた（突然、話し手は驚いている）

10 雨下了（ふりそうだと予測していた）雨が降ってきた（驚きがない）

11 天下着雨 雨が降っている（持続態も含まれる）、単純な持続態は「雨下着」となる

これらの例は場所目的を動詞の前に出すOV型の語順によって存在状況態あるいは発生状況態を表す。「在」と同じように動詞「有」には主語の意思が働いていない。存在状況態は存在状況動詞「・・がいる」（在）と「・・がある」（有）の動詞で表現される。動詞の「放」と「穿」は受動態としてとらえてもよい。それぞれ「・・が置いて（置かれて）ある（いる）」（「・・を置く」と区別すること）、「・・が着られている」と表現される。例5、6、7、8、9、の、それぞれ主語に位置する「我」「桌子上」「他」「我家」「天」はすべて「場」であり、話し手あるいは主語の意思（意志）に関係なく、「そういう状況になっている」あるいは「そういう状況が発生した」という現象を表現するものであるから、発生・存在状況態表現と呼ぶ。

では意思（意志）に関係ない、あるいは意思（意志）が働いていないということはどういうことか。場所目的と処置対象目的が同時に表現される「他把一本書放在了桌子上（彼がテーブルの上に本を置いた）」という出来事について考えてみよう。「彼」は「置こう」という意思をもって処置対象目的「本」を「テーブルの上に置いた」（動態的出来事—イベント化）ということである。そして、その後で誰かがそのことを知らないでその場所に行って見たら「桌子上放着一本書（テーブルの上に本がおかれてある）」（例6）という状態になっている。この表現には行為主体の主語「他」さえ省略され、その代わり処置対象目的である「一本書」が受身主語（置かれる）として認知されている。持続態を表す「着」をともなった動詞「放」には主語「他」の意思はもう働いていないし、この動詞には動き（動態）が感じられないだけでなく、話し手の意思（意志）にも関係なく、そういう状態（静態の対象物—オブジェクト化）になっているということである。

中国語は、SVO型の語順で認知される現実が生活の現実即したもっとも基本的な現実である。それがOVVS型で認知されるということは、現実自体のありかたが異質なものに大きく変化していることに気づいたからであろう。

日本語の「客が我が家に来た」(「我が家に客が来た」)は中国語では「客人来了我家」(SVO型)と「我家来了客人」(OVVS型)の二通りの表現に分かれる。前者のSVO型の「客人」は来ることが約束されている客であるから驚きは感じられない。OVVS型の「我家来了客人」は、約束していない客であり、話し手の「我」の意思には関係なく、そういう状況になってしまった、あるいは発生したと認知したということである。つまり、動詞「来」に行為主体「客人」の意思が働いているかどうかは問題ではなく、「客が我が家に来る」という出来事(イベント)が静態的状况態(オブジェクト)として認知されている。そこには、動詞「来」に「客人」の意思が働いているようでもあり、働いていないようでもある。このことは「他穿着衣服(彼は衣服を身につけている—裸ではない)」にも同様のことが言える。はじめ「他(彼)」は「着よう」という意思を持って「着た」(動態的イベント)なのであるが、あとでそれを見た話し手にとっては、「他(彼)」という場所オブジェに「衣服」という対象オブジェが「着けられている」という動きのない静態的状况態(オブジェクト)として認知されている。

発生・状况態は単純に完了態「・・した」で受ける場合もあるが、基本的には存在・状况態の「いる」「ある」で受ける。つまり「我が家にお客さんが来ている(いた)」という日本語も成立するのである。動詞を支配する発生・存在状况態はこれらの存在状况動詞「ある」「いる」(中国語では「在」「有」)から来ている。

§7 観照論理態は第二次動詞の態を変えらるとはどういうことか—第二次動詞の行為・動作は未実現、不確定であること

第一次動詞として、第二次動詞の前に来て、第二次動詞を支配し、第二次動詞の態を大きく変える態には、次のような種々の態がある。

- 1 否定態(・・しない、・・ない—不、没、没有) 我不吃飯、我没吃早飯
- 2 禁止命令態(・・するな、・・してはいけない—別、不要) 你別遲到
- 3 判断・断定態(・・である、・・のである—是、否定態は不是) 我是学生的、我不是学生的
- 4 丁寧態(・・です、・・ます、・・ございます—中国語にはない)
- 5 使役・被動態(・・させる、・・られる—讓、使、叫) 大家讓我說話、我叫他上課、收音機叫弟弟弄壞了
- 6 依頼態(・・してもらおう、・・して下さい—讓、請) 我請你吃飯
- 7 被動態(・・れる、・・られる—被) 我被敵人打傷了
- 8 願望態(・・したい、・・するつもりである) 我想去中国留学
- 9 義務態(・・しなければならぬ—應該、要、得) 你應該吃早飯
- 10 意志態(母音「う」で終わる動詞の終止形、意味機能的には現在態—中国語にも日本語にもない) 我吃早飯 我不吃早飯
- 11 習慣態(意志態に同じ、意味機能的には現在態—中国語にも日本語にもない) 我每天学漢語、(・・したがる、よく・・する—愛) 愛開玩笑
- 12 現在進行態(・・している—在) 我正在穿衣服
- 13 可能態(・・できる、かもしれない、はずである—能、会) 我会游泳
- 14 条件態(・・できる、してよろしい—能、可以)
- 15 許可態(・・できる、してよろしい—能、可以)

- 16推量態（・・・するはずである、ようである、であろう—可能、会、似乎、好像）
- 17比喻態（・・・するみたいである、ようである—似乎、好像）
- 18類似態（・・・するようである、ようである—好像）
- 19因果態（・・・であるから、ので—因為）
- 20仮説態（・・・するならば—要是、如果）
- 21逆説態（・・・すると言えども—雖然）我雖然喜歡詩詞、可是不会写
- 22疑念態（・・・すると言い難いか、・・・であるまいか—難道）你難道一直不知道嗎
- 23讓歩・仮定態（・・・するとしても—就是）就是我不在、也会有人接待的
- 24加算態（・・・するだけでなく—不但）
- 25限定態（・・・するほかない、するしかない—只好、只得）我把月票忘家里了、只得買票坐車。
 明天要是下大雨、運動会只好推遲。
- 26唯一条件態（・・・するだけ、・・・してこそ初めて—只有）只有改变以前的办法才行
- 27限定条件態（・・・しさえすれば—只要）我只要打個電話通知他、他就可以把東西送来。
 ただし、依頼態、使役態、被動態は中国語では兼語式文と呼ばれる。また「只」の付く「只管（かまわずに・・・する）」「只顧（ひたすら・・・する）」は中国語では副詞として連用修飾語を構成するが、第二次動詞の態を支配し変えることがない。この点が例25、26、27の「只好」「只得」「只有」「只要」の観照論理態とは違うところである。
- 観照論理態には現実の行為・動作をどのようにとらえているかという認知能力が働いている。現実の行為・動作はそれ自身だけで現れるものではなく、必ず発話者（話し手）の主観によって認知されているから、話し手がどのように感じたかあるいは考えたかということが付加されて行為・動作のあり方（様相、様態）が決まる。特に観照論理態は第一次動詞として第二次動詞の前に来てその動詞を支配しその態をも変えるほどに強い働きをする態である。現実の動作・行為のあり方を観照的かつ論理的に価値判断するという認知能力が働いた言語表現である。例えば、「他好像猫似的、一直睡覺（彼はまるで猫みたいに寝てばかりいる）」の「像」は状況動詞（猫に似て）あるいは半意識動詞（猫みたい）となるが、これが「好像誰在敲門（誰かがドアをノックしているようだ）」の「像」となると、動詞「敲」の動作・行為のあり方を、類推「・・・のようである」という認知の仕方ととらえ、論理的に表現したものである。すなわち類推態「像」は単なる普通の動詞ではないということである。また下記の例28、29からも観照論理態とはどういうものかわかるはずである。
- 28我想請他把那篇文章翻譯成漢語 私は彼にあの文章を中国語に訳してもらいたい（と思います）
- 29我覺得不太冷 私はあまり寒いとは思わない（感じない）
- 上の二つの文のうち「想」は「請」の態を、「請」は「翻譯成」の態を変える観照論理態である。「想」と「覺得」は一見同じ知覚・認識動詞のようにみえるが、例29の「覺得」は知覚・認識動詞であり、例28の「想」は観照論理態の動詞である。「覺得」は自然に心の中に（無意識に）のぼってくる知覚・認識であり、「想」は、はっきりと「思う（意識的に）」として思うことである。「覺得」は他の動詞の態を変える力もっていない。ここに観照論理態の動詞と普通の動詞の違いがある。さらに下記の例30、31、32を比較し、観照論理態とはどういうものかもっと詳しく考えてみたい。
- 30母親能跟我去買東西（母は私と買い物に行くことができる—条件・可能態）
- 31母親讓我去買東西（母は私を買い物に行かせる—依頼・使役態）
- 32母親跟我去買東西（母は私と買い物に行く）

例30は「能」による観照論理態であり、条件・可能性として「去買」という行為・動作を観念的に認知した表現であり、「母親」の行為・動作は未実現あるいは未確定である。例30は主語「母親」が「去買」という点では例32とイベント（出来事）の事実関係は同じように見えるが、「実際母親が買い物に行くかどうか」は未定、不確定である。つまり例30は例32より現実味が感じられないのである。例31もいわゆる兼語式の「讓」による観照論理態である。例30と例32では主語の「母親」が「去買」という行為・動作を行うのであるが、例31の観照論理態表現では、第一次動詞「讓」によって「去買」という行為・動作主は「我」になってしまう。つまり「母親」は「去買」という行為・動作を行っていないのである。生活の現実において実際誰が買い物に行くかが大事である。例31の「讓」は「我（私）」に対する他動性（影響力）を最大限強め「去買（買いに行く）」という行為・動作を行わせるということである。しかし「行わせる」というのはあくまで観念的であり、実際「私が行くかどうか」は未知数である。「讓」による観照論理態で「買い物に行かされる」よりも、ただ「私は買い物に行く」という言葉のほうがはるかに現実的である。このように観照論理態動詞は第二次動詞のあり方（様相、態）を大きく変えてしまうが、その行為・動作が実現されているかどうかというリアリティ（現実味）の点でやはり観念的であるといえる。

§8 被動式の「被」を前置詞（介詞）ではなく、観照論理態動詞とみなすことについて

- 1 我被敵人打傷了
- 2 敵人把我打傷了
- 3 敵人打傷我了

SVO型を基本とする中国語の目的語には、大きく呼称目的語、場所目的語、処置対象目的語の三つある。そのなかの処置対象目的語は日本語の場合と同じように受動文に変換できる。中国語の「叫」「讓」「被」（ときには「給」も）がそれぞれである。これらをなぜ観照論理態動詞とみなすのであろうか。たとえば、中国語本来の自然の発想としては、例3のように「敵人打傷我了（敵が私をなぐって傷つけた）」という単なる事実命題の意味を陳述するだけでよいはずである。事実命題の意味にしか認知されていない行為動作（出来事—イベント）をもう一段階高いところから観てみよう（観念化しよう）とする認知が働く。つまりその意識には害を被ったという気持ちがあり、「我」にとって不都合な事態がおこったという価値判断する認知が働き、普通の語順のSVO型ではとらえられないということに気付く。そこで新しい語順（文法）に論理的組み換えが行われる。それが例1の「我被敵人打傷了（私は敵になぐられ傷つけられた）」のSVO/SV型の兼語式受動文表現である。「被」は、意味的には受身であるが、機能的には「我」が「打傷」するのではなく、「敵人」が「打傷」するように“影響を及ぼしている”のである。つまり「被」は「敵人」に対する他動性を強め、動詞「打傷」の態を変えて、「・られる」という受動表現になる。

また事実関係としては同じことを表現している例2のように「把」処置式でとらえるとき、「打傷」という行為・動作者は「我」ではなく、「敵人」であるという点、つまり「把」は「打傷」という動詞の態を変化させることはない。形態機能的には同じように見えても、観照論理態の「被」と前置詞態の「把」とではその意味機能を異にする。「把」は確かに「我」という目的語を後置し、その目的語の話題性・処置性を強調するが、目的語「我」に影響を及ぼしている（強い他動性をもっている）のは動詞「打傷」である。しかし、「被」は「敵人」に対してその行為・動作の態を変えるほどの強い他動性をもっている。「敵人打傷我了」という出来事（イベント）を「被」によって観照論理化し、動詞「打傷」の態を受動態に変化させたのである。

したがって「被」は他者に影響を及ぼすことのない前置詞（介詞）とすることはできない。そして被害を受けているのが「我」でありながら、「把」処置式に置き換えると、それは他人事のようにになってしまうという不自然さが生ずる。

また「被」以外の受動表現「叫」「讓」あるいはほかの観照論理態表現すべては、次に来る第二次動詞の行為・動作が実現されるかどうか不確定である（端的にいうと未実現である）出来事（イベント）に終わる場合が多いのに対して、「被」の場合だけはほとんど実現された（ている）行為・動作であり、完了時相態で認知され、それは「了」で表現されることが多い。もちろんその否定態は「没」である。いったいそれはどうしてであろうか。害を被るという不都合な出来事は、不確定であるはずがないし、もちろん未実現であるはずがない。その出来事自身に現実味をもって深刻に認知されるような態が内在しているからである。だから逆にそれが不確定要素あるいは未実現性をもっていけば、主語「我」にとって不都合なことを表す被害動式の「被」を使わないで、「敵人打傷我（了）」という単純な（平板な）、価値付けのないSVO型表現になるはずである。

§9 注意すべき態について

進行態の「在」は本来的には「在那里」という前置詞態であった。人間の行為・動作は場所から切り離されて行われることは決してない。場所を強調することによって今日の前で行われているという臨場感を表現したのが、「在」現在進行態である。場所表現が習慣化して、明示しても意味がないので、自然と「那里」が脱落し、「在」だけで「(そこで)・・・して(いる)」という意味の状況動詞となったものと考えられる。

また英語の文法では関係副詞と考えられている逆説の「・・・であるけれども」は、中国語では「雖然」というが、もともと「言う」という意味の動詞であり、第二次動詞の行為・動作が実現されているかいないかに関係なく、「雖然」でとらえられると、たとえ実現されている行為・動作であってもそれは観念化される。観照論理態で表現される第二次動詞の行為・動作は、現実の生活のなかではほとんど未実現あるいは未確定のものとして認知されるが、逆説態「雖然」、因果態「因為(・・・なので、・・・であるから)」、疑念態「難道(・・・であるまいか)」、加算態「不但(・・・だけでなく)」で表現される第二次動詞の行為・動作には実現されている場合がある。しかし、たとえ実現あるいは確定されているものであっても、あくまでそれは観照論理的に認知されているのである。

動詞に直結する発生・完了態「了」と持続態「着」は状況態動詞である。「了」はあるひとつの行為・動作が「発生・完了する・した」として認知されたときの表現であり、「着」はあるひとつの行為・動作が「発生・完了した」あとにその行為・動作が「その場に付着して持続している」として認知されたときの表現である。この二つの状況態動詞は第一次動詞に直結してその行為・動作の時間的な有様（様相、様態）を一瞬にしてとらえていることになる。行為・動作の時間的様態はたえず変化する人間の生活・営為にとってもっとも基本的な認知能力でもある。

広い意味の状況態動詞としては「我(家)住在東京(東京に住み着いている)」の「在」、「我買到票(切符を買い得た)」の「到」などがあり、「在」は「住」という行為・動作の結果、「東京」という場所に「(住み)着いている(落ち着いている)」状況にあることを表す。この状況動詞「在」は本動詞「住」のあり方、有様を強調するものであり、「(住み)着いている(落ち着いている)」と認知しなければ使う必要はない。そのときには「我家住東京」あるいは「我家在東京」と表現すればよい。ほかにも中国語のいわゆる程度・結果補語を導く「得」も状況態

動詞とみなす。たとえば「我唱得好(じょうずに歌う)」の「得」は同じ状況態動詞「好」を導き、第一次動詞(本動詞)「唱」という行為・動作の結果あるいはその程度が間違いなくもたらされているという認知が作用している言語表現である。つまり「得」は「好」という状況態を「得る(・・になる)」という意味として、動詞「唱」の有様を要素・具体的に強調するときに働く状況態動詞である。

§10 観照論理態の「能」可能態と「得」実現・可能態はどう違うのか

1 我游泳一千米(私は1000メートル泳ぐ)

2 我能游泳一千米(私は1000メートル泳ぐことができる)

3 我游泳得了一千米(私は1000メートル泳ぎきることができる)

例1「我游泳一千米」と例2の「我能游泳一千米」のどちらが、実現性が強いであろうか。前者はいままさにプールのなかにおいてこれから泳ごうとする意思が感じられ現実味がある。例2の「・・することができる」(能力の可能性)を表す中国語の「能」はやはり観照論理であり、観念的な、頭の中でのことであり、実現していないことがらにおわっている。そこで、この言葉を聴いた聞き手は「ではほんとうに泳げるかどうか、やってみろ」ということになる。実際実行してみてもそれが実現されたというのであれば、例3の「我游泳得了一千米」ように、「得」の実現・可能態文で表現される。そこには行為・動作の可能性だけではなく、行為・動作の実現性も問題視されている。そこでこの言語表現を「得」実現・可能態ということにする。

ではなぜ実現・可能態文には否定態で認知されることが多いのであろうか。たとえば、「写得好(よく書くことができる)」の肯定態よりも「写不好」の否定態で表現されることが多い。現実的に可能性として「能写好」として言っておいたほうが、できなかったときの言い訳としても対応しやすい。そこで実現性が高い言い方の肯定態「写得好」で言うことを避ける。「できない」という否定態「写不好」の表現を用いることによって現実的な(リアルな)対応をするからである。だから、同じ「能(できる)」でも動作行為の実現性を問題にしない単なる条件や許可の「できる」は可能補語で表すことはしない(否定態、肯定態のいずれでも)が、条件の結果、明確に実現性がないと認知されたときには否定の実現・可能態で言うことができる。

§11 行為・動作の状況態が目的語をとるとどうなるか

一つの行為・動作には、姿、格好(様態)がある。「坐(すわる)」という動作は現実には辞書的な意味で行われることは決してない。それは「坐了(すわった)」、「坐着(すわっている)」あるいは「坐好(格好良くすわる)」のように、現象してくる行為・動作を人間はいろいろなかたちでとらえている。ひとつの行為・動作がどのようなあり方(様態)をして現出してくるか、つまり一瞬にして行為・動作の状況態をみてとる(認知する)のである。中国語は何千年来SVO型の認知構造を保持してきたのであるが、この単純な認知構造のなかに行為・動作の状況態を表現しようとするときに、下記のような構造変異体が編み出された。例0は中国語にとってわざわざ普通のSVO型の認知作用によってとらえられた表現である。例1 状況態状語文、例2「把」処置式文、例3 程度・結果状況態文および例4 実現・可能態文について表現の焦点がそれぞれどこにあるかを考えてみよう。

0 你写清楚汉字(漢字をはっきりと書く)

1 你清楚地写汉字(漢字をはっきりと書く)

2 请把汉字写清楚(漢字をはっきりと書いて下さい)

3 你(写) 汉字写得清楚(漢字の書き方がはっきりしている)

你(写) 漢字写得不清楚(漢字の書き方がはっきりしていない—否定態)

4 你写得清楚漢字(漢字をはっきりと書くことができる)

你写不清楚漢字(漢字をはっきりと書くことができない—否定態)

ようするに認知の段階では構成要素に分解できないものとして(ゲシュタルト的に)概念化されている「清楚(はっきり)」「写(書く)」「漢字」の3要素は、分節して言語表現される段階で、それぞれ認知の焦点が違ってくるといことである。例1の焦点は例0と同じように処置対象目的語の「漢字」にあり、状況態状語文として中国語本来のSVO型構造でとらえられた表現である。例0と例1の違いは、分節するとき、「写」という行為・動作のあり方、様態をその動詞の前でとらえたか、後ろでとらえたかの違いにすぎない。認知の焦点が話題性にある例2の「把」は、認知作用が分裂するので、動態的な実現・可能態や静態的な程度・結果状態を表現する「得」とは共起することができない。例3はいわゆる程度補語あるいは結果補語であり、表現したいことの焦点は静態的状况態「清楚」にある。例4はいわゆる可能補語であり、焦点は動態的实现・可能態の表現「写得清楚」にあり、目的語を後ろに分節させることによって、中国語本来のSVO型の構造に回帰したことになる。

このことを「彼はテニスがじょうずである(じょうずにできる)」という日本語文でもっと詳しく考えてみよう。

5 他網球打得好

6 他把網球打好

7 他把網球打得好

8 他打得好網球

例5「他網球打得好」は「得(・・になる)」という状況動詞をわざわざ取ることによって「打」という行為・動作が「好(じょうずに)」という状況態でなされたことを強調しようとした表現である。例7は「把」による処置・話題性と、「得」による状況態の強調性とに認知の焦点が分裂するので、この表現は成立しない。したがって例6の「打好」が成立するけれども、程度・結果補語と処置式を同時に盛り込んだ例7「他把網球打得好」の「打得好」が成立しないのは、逆に「得」は「打網球」という動作行為が「好」という状態でなされる(なされた)ことを明示するために必ず必要であることを証明している。「好」を強調し明示するの必要がなければ、「打好」だけでよいということになる。「得」で明示しない「打好」という表現には動きがあり、動詞「打」に直結する状況動詞「好」にも動きが感じられるが、認知の焦点は「打」という動作行為そのものにある。

また例7が成立しないのは認知の焦点が処置・話題性と実現・可能性に分裂するからであるが、実現・可能性の認知構造として成立する例8「他打得好網球」は、もともと例5のような結果・程度補語文から派生してきている。例5は状況態「好」で言い切りになることによって動きが感じられない状況態「好」が強調されている。しかし、これが例8のように処置対象目的語「網球」を後置させると、「打」は他動性の強い動詞として機能することになる。そして単に「好」という状況態を表現するにとどまらず、積極的に「好」という状況態にすることができるとい実現・可能態として認知される。例6の「打好」にも他動性はあるが、例8のような積極的などというよりもっと強い他動性が作用した可能・実現態が表現されていない。

§12 簡単な状況態と複雑な状況態

動詞の前に来る「好吃」の「好」も状況態の動詞(「よくする、よくなる」)であり、動詞「吃」を修飾するが支配しない。同じように「学好」の「好」も、「学びととのえる(おえる)」とい

う意味として、機能的に動詞「学」を後ろから修飾するが、支配しない状況である。状況態の基本的意味機能は、第一次動詞の前に位置するか後に位置するかに関係なく、第一次動詞のもつ行為動作のあり様、様態を表現することにある。

行為・動作がどんなに複雑な状況でなされようが、例えば「我不由自主地懷念北京」（我知らず北京を懐かしく思う）の「不由自主」や「他不分昼夜地照顧我」（彼は昼夜を分かたず私を世話してくれる）の「不分昼夜」は第一次動詞の「懷念」や「照顧」を修飾するが、支配することはない。これらの状況態は第一次動詞の「懷念」や「照顧」にとって、動作主の心の様態や動作の様態を描写する副次的な客観的観照対象にすぎない。中国語ではこれらを描写性状語（副詞句）とよぶ。

§ 13 前置詞（介詞）状況態とは何か—日本語には前置詞がない

1 私は独りで買い物に行く 我一個人去買東西

2 私は彼と買い物に行く 我跟他去買東西

例1の「独りで」も例2の「彼と」も「買い物に行く」という行為・動作の状況（様態、有様）を具体要素的に認知した表現である。日本語では単なる助詞「で」と「と」の違いだけで、連用修飾語として、後続の動詞を修飾していると解釈するが、中国語には例2の「跟他」の「跟」のように英語の前置詞と同じ意味機能を持つ前置詞がある。中国語の前置詞（介詞）は日本語の助詞「で（在）」、「と（跟）」、「から（從）」、「まで（到）」、「に（往）」、「を（把）」、「に（給）」、「より（比）」、「にそって（沿着）」「もちいて、で（用）」などがあてはまる。中国語の前置詞（介詞）は名詞（句）の前に来てそれを目的語にする。おそらく英語の前置詞も中国語の前置詞も動詞が虚化したものであり、他者にたいする影響力（他動性）が弱化した動詞であると考えられる。この前置詞句はひとつの行為・動作の有様（様態）を修飾するので意味機能的に前置詞状況態とよぶ。

前置詞状況態は第一次動詞（本動詞）の前に来て、動詞と連用修飾関係を構成するが、話し手または主語の意思（意志）が働いていないので、後に来る第一次の動詞を支配しないし、その態も変化させることがない。だから「我把那个電視看了」の「把」は前置詞であり、「我被敵人打傷了」の「被」はいわゆる兼語式文の動詞であり、観照論理態の被動態動詞である。意味は受身であるがその意味機能（働き）について言えば、「被」は他者の「敵人」に影響力をもつ他動性の強い動詞である。だから前者は日本語では「テレビを見る」の助詞「を」として訳され動詞の態を変化させない。後者は「敵にやられた」の「られる」（受動態）という日本語として、動詞「やる」（打傷）を支配しその態（ありかた）を変化させる。

§ 14 「把」話題・処置態文（いわゆる処置式文）とは何か—目的語にたいして話題・処置性を認知すること

1 我跟他去買東西 私は彼と買い物に行く

2 我把那个電視看了 私はあのテレビ（番組）を見た（個別・具体的なテレビ）

3 我看電視 私はテレビを見る（一般的なテレビ・映像として一習慣あるいは意思としての行為・動作「看」）

我看了電視了 私はテレビを見た

4 我把電視看 私はテレビを見る（処置性が認知されない行為・動作「看」）

我把電視看了 私はテレビを見た

5 天氣黑了、把電灯開開 暗くなったから電気をつけましょう

我把電視機開了 私はテレビをつけた

6我把那個電視看了 私はあのテレビを見た（あのテレビについて言えば見た）

7電視、我看一下 テレビは、私はちょっと見る（目的語テレビが主題化される）

我每天不看報、把電視看的 私は毎日、新聞を見ないが、テレビというものは（について言えば）見るのである

例2「我把那個電視看了」の「把」と例1「我跟他去買東西」の「跟」は同じ前置詞扱いにするが、処置対象目的語を取るときの前置詞「把」だけが処置式として特別扱いされるのはなぜか。ほかにも呼称目的語をとる「我叫山田太郎」（私は山田太郎といいます）や場所・到達目的語を取る「我去學校」などは、前者は前置詞で表されない場合であるが、後者は「我到學校去」のように前置詞で表されても問題視されない場合があるのはなぜか。それは処置対象目的語が人間の行為・動作にとって、もっとも直接的かつ即物的に目に見えて眼前にあるものとして（リアルに）認知されるからである。それは目的対象に対して処置が働く（いている）のが認知されやすいからである。その動詞は他者に影響を及ぼす他動性の強い動詞で表現されることが多い。

一般的に例3「我看電視（私はテレビを見る）」というイベントは中国語本来の認知構造のSVO型で表現されているから成立するが、「看」という行為・動作には目的語「電視」に対する強い働きかけ（処置性—他動性）が感じられない。つまり「電視」にたいして受身的にあるいは弱い他動性をもって「看」しているのである。したがって処置性の認知されない行為・動作「看」に「把」を使う例4の「我把電視看」「我把電視看了」は成立しないことになる。しかし例5「天氣黑了、把電燈開開（暗くなったから、電氣をつけましょう）」の「開」は対象目的語「電燈」に対して及ぼす影響力（他動性）が強く、処置性が生ずるから「把」処置式文として成立するのである。つまり他者の「電燈」に対して即物的に働きかけているからである。したがって、例5「我把電視機開了」（テレビをつけた）は成立する。その動作・行為が対象物に対して直接的かつ即物的に働きかけがなされているかどうか認知されなければならない。それが間接的かつ抽象的である対象物、つまり場所・到達目的語や呼称目的語は他の前置詞で表現されても、「把」前置詞ではとらえられない（表現されない）のである。

目的語は動詞の後ろに来るのが自然であり本来の中国語のSVO型の構造を持つべきものであるが、「把」によって目的語が前置されてSOV型になるということは現実の認知作用に大きな変化がおきたことの証明である。中国語はものごとを抽象・一般的に概念化（認知）することを嫌う。単に一般的な抽象的な「テレビ」ではなく、「あのテレビである」という話題性（特定性・具体性）が認知されると、「我把電視看了」は成立しないが、例6「我把那個電視看了」の表現は成立する。やはり話題性をもたせるためにも処置性が強調されなければならない。したがって逆に「テレビというものは—テレビについて言えば」（新聞や週刊誌とは違う）というように話題性（特定性・具体性）を持って対象目的語「テレビ」を認知していれば、例7「我每天不看報、把電視看的」（私は毎日新聞を見ないが、テレビというものは見るのである—習慣あるいは意志として）は成立する。処置性と話題性を強調して目的語を認知したときに、「把」話題・処置態文で表現されることになる。

この「把」話題・処置態文については、もうひとつ大きな認知作用がある。いままで後に処置対象目的語を従えて、最大の力（他者に対する影響力—他動性）をもっていた動詞が、「把」によって目的語が前置されたために、力をもって行き場所を失ってしまい、動詞としての機能（他動性）が弱まる。たとえば例2「我把那個電視看」の「看」は弱化した機能を回復すべく、末尾に一言「了」をつけ、動詞として機能していることを明示する。また末尾を「看看」や「看

一下」にし、同じ行為動・作を名詞化した目的語「一看（見ること）」や「一下（ちょっと見ること）」をつけることによって、動詞としての機能を回復する。ようするに形態機能的に目的語をとるように認知作用が働き、言語認知能力に潜在化されているSVO型の語順に回帰するということである。

§15 中国語の語気詞（啊 吧 呢 吗 喽 啦 呀 的 哩 了）と日本語の終助詞（か な なあ の こと ぞ わ よ ね さ）は同じ意味機能をもつ

- 1 你是中国人（あなたは中国人である—決め付けている）
- 2 你是中国人吧（あなたは中国人ですよ—控えめに判断している）
- 3 你是中国人不是（あなたは中国人であるかそうでないか、どちらですか）
- 4 你是中国人吗（あなたは中国人ですか—はっきりとした疑問）
- 5 你吃饭不吃（あなたはご飯を食べるか食べないか、どちらですか）
- 6 你吃饭（ご飯を食べろ—家族やほんとうに親しい間柄に）
- 7 你吃饭吧（ご飯を食べましょうね—家族でも幼児にやさしく母親が言うとき、お客さんに勧めるとき）

中国語の文末語気詞と日本語の終助詞は、命題的意味を表すのではなく、疑問、命令、感動、同意、確認、勧誘、丁寧などの話し手の心的態度を表す。語気態とよぶ。命題的意味を表すのでなければ、基本的には言語表現されなくてもよいが、印欧語と違ってアジアの言語は、言葉にはならない感情を大事にし、聞き手と話し手の関係を価値判断し感情的に認知するからである。

「吗」と「吧」は意味のある否定態の「不」から派生したものと考えられる。本来中国語の疑問態は「・・する」か「・・しない」か、「・・である」か「・・でない」という選択疑問で表現されていた。文末に来る否定態の「不」の音と同じ系列の唇音のmaによって、明確な疑問の語気詞（語気態）を一般化することになった。「吗」で表すほどに明確な疑問ではないが、半分くらいは当たっているのではないかという疑念の気持ちを表すのがやはり同じ系列の音である「吧 (ba)」である。この半信半疑の気持ちが控えめな判断となり、さらに控えめに聞き手の気持ちを引き出すという態度にも変化していく。

発生・完了態から派生した「了」は文末にきて、もっとも早くに語気態として文化化した。意味的にもその語源が明確なのは「了」だけであり、「吗」「吧」を除く、あとの語気詞（語気態）はみな「了」と同じ仲間の音の前舌音 (de, te, ne, le) から派生している。発生・完了態の「了」に対して「哩」、「呢」は現在進行態を、「的」は確定・断定態を表す。

驚きや感動を表すもっとも単純な音は口を大きく開く「阿」の音であるから、この母音系統の音も語気詞（語気態）になりやすい。「了」「吗」「吧」以外の語気詞はみな意味のない音だけの連想によって生まれたものであると考えられる。

§16 日本語にも中国語にも「ものを数えるときに使う名詞」があること

- 1 鳥賊2杯（はい）、鶏3羽（わ）、筆筒ふた棹（さお）、寿司2貫（かん）
- 2 一条魚、一只猫、二碗飯、一個学生、一座建築
- 3 我是学生（私は学生である）
- 4 你真是一個好学生（あなたは本当にいい学生である—日本語では「ひとりの」が付かない）
- 5 我要一個女孩子（私は女の子がほしい—生まれてくる子供は女の子がいい）
- 6 我吃了飯、・・・（私は食事して・・・—話が終わっていない、聞き手は次を待っている）

7 我吃了二碗飯。(私は2膳ご飯を食べた。—終了感がある)

例1、2のように日本語も中国語も、ものを数えるときに、そのものの形態的特徴を認知し、それに相応しい名詞で修飾する。中国語のほうが日本語より徹底して使い分け、あらゆるものに被せる。それは現実の世界には人間が知覚認識できるものはすべて個別・具体的かつ数量的に存在するというリアリズム（現実主義）の認知能力が強いからである。この種の認知能力はほかにも、目に見えない行為・動作の量を目に見えるかたち（動量態）として目的語化する働きにも見られる。例3は「学生」という抽象的な身分を表しているにすぎない。それが例4になると、その学生は今日の前に居る個別・具体的なそれも一人の学生であるというように数量的にも認知している。例5のように子供の数を問題視しているのではないにしても、「一個」として数量化するとリアルに現実を認知したことになる。例6のように「飯（食事）」一般ではリアルさ（現実味）に欠けるから、聞き手は実際何をいくら食べたかということを知りたがっているのである。例7のように目的語を数量化して言うとき聞き手はそこに現実味を見出すのである。中国語ではこの数量化するときに必ずいわゆる量詞（ものを数えるときに使う名詞）を付けるということである。

§17 いわゆる程度補語も結果補語も状語（副詞句）もすべて状況態としてとらえること

1 彼は昼夜を分かつ私を世話する 他不分昼夜地照顾我

2 私は字をはっきり書く 我清楚写字

3 天気は寒くて手足がしびれそうだ（しびれるようだ）（になる）

天気冷得像手脚麻木

4 天気は手足がしびれるような程・くらい寒い 天气冷得像手脚麻木

5 天気は手足がしびれる（みたい）ように寒い 天气像手脚麻木似的冷了

結果態（・・・になる—変化態と同じ）と状況態は逆転しないが、日本語では程度態（ほど、くらい）が逆転している。ということは中国語の「写清楚」の「清楚」を程度補語としてだけとらえるのではなく、日本語の「書いて（書いた結果）はっきりとなる」という結果補語に訳してしまうこともできるということである。

つまり「寒い」程度あるいは、「寒い」状況を言う時に二つの言い方がある。「天気は手足がしびれそうなほど・くらい寒い」という状況・程度態で表現する場合、もう一つは「天気は寒くて（寒い結果）手足がしびれそうなほど・くらいである（になる）」という状況・結果態で表現する場合がある。後者の表現は結果態と程度態が同時出現する表現である。そうすると、中国語の側からも、「動詞（あるいは状況動詞）→程度補語・結果補語」も「状況態（副詞）→動詞・状況動詞」も連用修飾語関係として統一的に日本語を理解できることになる。もともと中国語の場合程度補語と結果補語は明瞭な意味機能の差異を見つけにくいからである。程度補語と結果補語もまた可能補語も含めてこれらで表される態はすべて状況態とみなす。

6 彼は医者になる 他当医生

7 空が明るくなる 天亮了（変化態の「了」が「・・・になる」）

8 彼女は美しくなる 她长得漂亮

9 彼はテニスが（テニスをするのが）上手になる（である） 他打网球打得好

日本語の変化状況態「・・・になる」は必ずしも程度・結果補語を表すとは限らないことに注意。

日本語の「・・・（に）なる」は例6、8のように大事な動詞が表現されないことが多い。中国語では例6のように「当」という動詞が明示される。また例8の「她长得漂亮（美しくなる）」

は「成長する」という動詞が明示され、その結果として「美しくなる」という結果補語または「美しくなるほど成長した」という程度補語で表現される。例9の日本語では「打」という動詞が明示されない場合がある。例8、9にみられるように、その動詞が状況態を伴う時に日本語では、大事な動詞が明示されないことが多い。

また、動詞の後に来る状況態と動詞の前に来る状況態は必ずしも同じ意味機能を持つとは限らない。「他不分昼夜地照顧我」の「不分昼夜地」のように状況態は文から成り立つものもある。動詞の前に来るから、形態的には副詞態の一つである。「他不分昼夜地照顧我」は意味、機能ともに成立するが、「他把我照顧得不分昼夜的」は機能的には成立しえても、意味的には不自然である。日本語の意味としても「私を面倒見るのが昼夜をかまわないほどである」(程度態)、あるいは「私を面倒見た結果昼夜を分けることがなくなる」(結果態)は成立しない。したがって、これは状況態としてだけしかとらえられないのである。程度・結果態と状況態も今まで述べてきた多くの態と同じように、現実の行為・動作には姿、かたちがあるという見方、感じ方であり、発話者(話し手)のそういう見方、感じ方を認知能力とよぶ。内面の状況態として「我不由自主地懷念北京」の「不由自主地」もこれと同じことである。状況態とは話し手が現出する(した、している)ひとつの行為・動作を感覚・知覚的かつ具象・描写的に認知した表現であると言える。

§ 18 関係論理副詞と状況態副詞の違いはどこにあるのか

日本語の副詞も中国語の副詞もその扱い方はかなり難しい。副詞には動詞の前に来て連用修飾関係を構成し、状況態として行為・動作の姿、かたち(格好)を表す(修飾する)ものと、時間と空間あるいは質量の関係論理を表すものがあり、後者は状況態を形成できない。いずれの副詞も否定態、可能態、被動態などのように態として動詞を支配するものではない。前置詞態と同じように、きわめて独立した存在であり、他者(動詞)と関係をもつことによってはじめて副詞として機能する、つまり両者とも形態的機能的には他者(動詞)との連用修飾関係を構成するだけである。しかし意味機能的には関係論理副詞は動詞をまったく修飾しない点が状況態副詞と大きく異なる特色である。

- 1 一人で中国に行った 我一個人去過中国
- 2 友人と中国に行った 我跟朋友去過中国
- 3 飛行機で中国に行った 我坐飛機去過中国

日本語では、例1の状況態副詞と例2、3の前置詞状況態とは区別されない。中国語では、「一個人」は動詞「行く」を修飾する状況態副詞であり、「跟朋友」と「坐飛機」は前置詞態である。しかしこの前置詞態は形態機能的には前置詞態であるが、「友人と」「飛行機で」の意味として意味機能的には動詞「行く」を修飾する状況態副詞となる。

また「一個人」は本質的には名詞であり、動詞「去(行く)」を修飾することによって、はじめて副詞になり状況態として機能する。日本語では「一人で」の「で」も「友人と」の「と」も同じ助詞で、英語や中国語のような前置詞がないので意味機能の区別がない。

- 4 一天吃三頓飯(一日三回食事する) 我吃三頓飯(三回食事する)
- 5 我一天走一個小時(私は一日に一時間歩く) 我走着一個小時(一時間歩いて)
- 6 他整天捧着本書(彼は一日中本にかじりついている)
- 7 他干了三整天活(彼はまる三日間仕事をした)

例4、5の「一天」は「吃」「走」という動作行為の量を測る時間量ではなく、測るときの基準を論理化した関係論理副詞である。また同じ「整天」でも例6は時間的範囲を論理化した関

係論理副詞であるが、例7は「干活」という動作行為の時間量を測る処置対象目的語化した名詞であり、副詞とはみなされない。これらの関係論理副詞は、形態機能的には動詞を修飾する連用修飾語のように見えるが、意味機能的には動詞を修飾してはいない。関係論理副詞はその前後の事柄や出来事を論理的に関係付けているだけである。これらの副詞は同じく動詞の前に来る状況態副詞と形態的には似ているが、それとは大きく異なる特色をもっている。関係論理副詞には具体的に次のようなものがある。

A とても、大変、すごく、こんなに、どんなに、ことのほか、特別に、かなり、非常に、絶対に、比較的（質的程度—質的範囲の関係論理—質量副詞）

B 今年、昨日、木曜日、一日中、一日に、いつも、ときどき、ちょうど、あるとき、ある日、すでに、むかし、これまで、いままで（中国語では前置詞態「到現在」）、ずうと、はじめて、はじめ、最初、かつて、いつ、いま、また、現在、もうすぐ、いまにも、いつでも、随時（時間と経過—時間的範囲の関係論理—時理量副詞）

C そこ、ここ、あたり、一面、こちらあたり、どこかで（空間的範囲の関係論理、前置詞で表すこともある—場理量副詞）

D すると、すぐに（中国語の「就」）、たちまち、突然、ふと（時点—時間的範囲の関係論理—時理量副詞）

E も（中国語の「也」）、かえって、そこで、それで（中国語では前置詞態「因此」）、すると、すなわち、そのうえ、しかし、だから、やはり、どうして、なぜ、たぶん、まったく、到底、こそ、きっと、必ず、およそ、いよいよ、ますます（越）、いっぱい（一辺）、ただ・だけ（只有）（実事的範囲の関係論理—事理量副詞）

F みんな、ぜんぶ、すべて、まるまる、一切、一部、半分、たいてい、部分、大部分、すこし、ちょっと、比較的（物量的範囲の関係論理—物理量副詞）。

「到現在」や「因此」のように前置詞態で表現される関係論理副詞もあるが、意味機能的には後置する動詞を修飾するものではないことに注意。

これらの副詞はその副詞を挟んで前後のものあるいは事がらの関係を範囲（集合論）的に論理化したものである。それは状況態副詞のように後ろのものや事がらを修飾しないし、また形態機能的には連用修飾関係を構成するが、他者から完全に独立した存在であり、ただ二者の関係を純粋に論理付けるだけである。

例えば

0 我早点去（私は早く行く） 就職（比較的高い地位に就く）

1 我就去（私はすぐ行く）

2 下雨就不去（雨が降れば行かない）

3 一直往前走、就是车站（まっすぐ行くと、そこが駅です）

4 只有愛人才最了解他的脾气（妻だけが彼の気性をよく知っている、彼の妻にしてはじめて…）

5 只有改变以前的办法才行（これまでのやり方を変えてこそはじめてよくなる）

日本語では「すぐ行く」の「すぐ」と「早く行く」の「早く」は単なる副詞として扱われるが、中国語では例1「我就去（すぐ行く）」の「就」と例0「早点去（早く行く）」の「早」の意味機能が違う。また例0の「就職」の「就」は後ろに目的語をとる動詞である。

例1の「就」はその前後の「我」というもの（オブジェクト）と「去」という行為・動作イベントの関係、しかも両者の時間的関係（範囲）を論理付けているのに対して、例0の「早」は動詞「去」という動作・行為の有様を具体要素的に描写しているだけである。「就」はまた「すなわち」という意味として、例2の「下雨就不去（雨が降れば行かない）」のように、「就」の

前後のイベント（出来事）の事実的關係（範囲）を論理付けている。つまり「就」の前後のことがらが事実的に直結しているという認知が働いている。これを事理量副詞とよぶ。例3は「一直往前走」というイベント（事柄、出来事）と「車站」というもの（オブジェクト）が事実的に直結しているという認知である。一般に關係論理副詞はものどもの、ものとイベント（事柄、出来事）、イベントとイベントの關係（意味的範囲）を認知しそれを論理付けた表現である。

また例4の「只有」は後続のイベント「了解他的脾气」との事実的範囲を論理的に關係付けた關係論理副詞であるが、例5の「只有」は後続の第二次動詞「改变」を支配しその態を大きく変える觀照論理態である。

しかし、これらの關係論理副詞は「大変する」、「昔」（「する」をつける）、「ふとする」「しかしする」のように一般動詞「する」をつけても、その動作・行為の内容がどんなものが伝わってこないという特徴も有する。具体的な動作・行為あるいは状況が例えば、「大変悲しい」「ふと思ひ出した」のように明示されないと、どんな内容をもつ副詞なのかが伝わってこない。つまり動作・行為の状況態にはなれないし、第一次動詞を修飾もしないし、支配されることも支配することもない。それに対して同じ副詞でも「ひとりで」とか「はっきり」とかは一般動詞「する」をつけても、動作・行為の状況がどのようになされているかが伝わってくるというのが状況態を形成できる状況態副詞の特徴である。

呼応關係を作る「不但・・・、而且・・・」の後の「而且（そのうえ）」（事実的範囲の論理）は副詞として扱う。前の「不但」は「だけでない」という動詞として次の第二次動詞の態を変化させ、支配する觀照論理態であるが、後ろの副詞「而且」は前後の事柄を集合的に論理付けた關係論理副詞である。これらの副詞は本質的には名詞あるいは動詞であるから、機能的に他者（動詞）との關係をもつことによって副詞態となるが、これらの關係論理態副詞は他者（動詞）から完全に独立し、自分の前後の事柄や出来事の相互關係を純粹自立的に論理化しただけである。だから、形態機能的には他者（動詞）を修飾するようにみえるが、意味機能的には他者を修飾していないし、第一次動詞から支配されることもない。また日本語の世界では、これらの副詞に一般動詞の「・・・する」を付けて動詞化しても、例えば、「しかしする」「とつぜんする」「まるまるする」「もする」などのように、具体的な動作・行為がどのようなものが伝わってこない。それは、關係論理を表すこれらの副詞は状況態を表す副詞とは違って、動作行為の様態を表現するものではないからである。

ところが、「我一個人去過中国」の副詞「一個人」は同じ副詞でも、これは本質的には他の副詞と同じように名詞あるいは動詞であるが、機能的には他者（動詞）からは支配されない。しかし他者（動詞）との連用修飾關係を構成するので状況態副詞とよぶ。「去（行く）」という動作行為の様態（手段）を表現する。つまり、意味機能的にも明確に他者（動詞）を修飾しているからである。また「ひとりでする」は、これだけで意味ある動作行為を表現することができる。「ひとりで」は動作行為の様態を具体要素的に表現する状況態副詞とみなす。このような状況態副詞には次のような例がある。

A 速く（中国語の「快」）、早く、ゆっくり、はっきりと（書く）、ひたすら（只顧）、かまわずに（只管）——動作行為の様態

B さわやかに、楽しく、はっきり（と覚えている）、謙遜して（言う）——動作をする動作主の心情の様態

C みずから、公然と、完全に、ひそかに、たえず、不斷に、だんだん（ゆっくり）、一掴み、ひとりで、どのように、ひたすら（只顧）、かまわずに（只管）——様式や手段を表す

D ふわりと、だらだらと、ぐいと、ざあざあ、しくしく——擬態語や擬声語

これらの状況態をつくる副詞は基本的には中国語も日本語も名詞あるいは動詞が抽象化したものとみなす。また日本語の世界では、これらの状況態をつくる副詞に一般動詞「・・する」を付けて、それだけでも意味ある動作行為を表現することができる。「早くする」「楽しくする」「完全にする」「だらだらする」「しくしくする」「ひとりでする」など。これらの状況態となることのできる副詞は、動詞化した抽象名詞あるいは抽象名詞化した動詞ともいえる。

§ 19 関係論理副詞の特殊性について—状況態副詞や観照論理態との違い

1 我的病還沒完全好（私の病気はまだ完全によくない）

2 他的意思表達得很完全（彼の言いたいことはすべて表現できた）

完全的表達（完全な表現）

3 那種花的香味很特別（あの花の香りはとても変わっている）

4 那種花香得特別（あの花は香り方が特別である—変わっている）

5 那種花特別香（あの花はことのほかいいにおいがする）

6 價錢特別便宜（値段が特別安い）

特別的任務（特別な任務）

7 只有愛人才最了解他的脾氣（妻だけが彼の気性をよく理解している—実事的範囲）

8 只有改变以前的办法才行（前のやり方を変えてこそはじめてよくなる—観照論理態の唯一条件態）

質量副詞「特別」と状況態副詞「完全」を比較して、質量副詞の特殊性を考えてみよう。「完全」は第一次動詞の前にも後にももってくることができる。例1「我的病還沒完全好」の「完全」は状況動詞「好」の様態あるいはあり方を具体要素的にとらえ描写した表現である。「我的病」と「好」との関係を質的の程度の関係論理あるいは実事的範囲の関係論理として認知しているのではない。つまり「どの程度よくなっているか」を問題にしているのではない。例2「他的意思表達得很完全」の「完全」は「すべて」と日本語訳されているが、動詞「表達」の質的の程度を論理付けているのではなく、動詞「表達」の様態（状態）あるいはあり方を要素的かつ具体的に認知し、描写的に表現する状況態副詞である。したがって、「完全表達」のように動詞「表達」の前に来て連用修飾語として状況態を形成できる。これが状況態副詞の特色である。

「特別」は例3「那種花的香味很特別」の「特別」は「変わっている」という意味の状況動詞（形容詞）である。したがって例4「那種花香得特別」の表現は成立する。動詞の後に来て状況態副詞にはなれるが、動詞「香」の前に位置し例5「那種花特別香」の「特別」は動詞「香」の様態あるいはあり方を具体・要素的に描写する状況態副詞ではなく、名詞「花」と動詞「香」の質的の程度をとらえた関係論理副詞である。同じように例6「價錢特別便宜」の「特別」は状況動詞「便宜」の前に位置するが「便宜」の様態（有様）を具体・要素的に認知してはいない。関係論理副詞の「特別」は形態機能的には後の動詞と連用修飾関係を構成しているが、その前後の「價錢」と「便宜」の関係を質的の程度あるいは実事的範囲を論理付けた表現である。この関係論理副詞の日本語の意味は「ことのほか、わざわざ、特別に、たいへん」という意味である。「特別」と「完全」は一見して同じ意味機能を持っているようにみえるが、前後のものやことからの関係を集合的（範囲・程度量として）に論理付けているかどうか大きな違いである。

また例7、8に見られるように同じ「只有」でもそれぞれ関係論理副詞と観照論理態として大きくその意味機能を異にする。

「完全」は状況態副詞（状況動詞として）にしかなれないが、「特別」は状況動詞あるいは関

係論理副詞にもなれる。また状況動詞あるいは状況態副詞として成立する「完全」と「特別」は「完全的表現（完全な表現）」や「特別の任務（特殊な任務）」のように連体修飾語を形成する。ほかにも「決まっている」という意味の「一定的成分（一定の成分）」の「一定」のように、一部の関係論理副詞は状況動詞（形容詞）として連体修飾語の意味機能を持つことができるが、多くの関係論理副詞は、例えば、「也（・・も）」、「就（すぐ）」や「整整（まるまる）」は「也的行為」、「就的時間」や「整整的一个星期」のように連体修飾語としては成立しない。ここにも関係論理副詞の特殊性がみられる

§ 20 目に見えない行為・動作の量はどのように測るのか—動量態とは何か

日本語も中国語も行為動作は量的に測ることができる。ただしそれは目に見えて形に残らないものであるから、それをどのように認知し言語に表現するかがそれぞれの言語体系になって現れる。

中国語では目に見えない行為・動作を量的にはかり、動量態（時間量、距離量、回数）として動詞の後ろに分節し、目的語として認知される。このような認知作用は中国語に極めて特徴的な言語表現である。

- 1 一時間歩く 走一個小時
- 2 四キロ歩く 走四公里
- 3 一度（回、遍）中国に行ったことがある 我去過一次
- 4 一日三度ご飯を食べる 一天吃三頓飯
- 5 一日三杯（三膳）ご飯を食べる 一天吃三碗飯

例1の「一個小時」は時間量詞、例2の「四公里」は距離量詞、例3の「一次」と例4の「三頓飯」は回数量詞である。動量態は中国語も日本語も基本的には名詞（抽象名詞）である。普通、目に見えない行為・動作の量は抽象的な状況態副詞として動詞の前に分節させても、中国語としては不都合なことが生じない。たとえば、例4は「一天三頓吃飯」の表現が可能性としては成立してもよいのであるが、中国語では目に見えない動量態「三頓」を目に見えるものとして認知し、それを動詞が統語する処置対象目的語化（オブジェ化）してリアルに表現する。例5の「三碗飯（三杯のご飯）」ははっきり目に見えるから完全な名詞であり目的語になれるが、「三頓（三度）」は実際「吃」という行為を行ってみても、抽象的な目に見えないかたちで認知されている。それが具体的な目的語である名詞の「飯」と結びついてはじめて目に見えるリアルなかたちになる。つまり動量態とは目に見えない行為・動作の量を、目に見えるかたちにして目的語にするという認知作用が働いている。

§ 21 量化できる状況動詞はその比較差量をどのように測るのか

- 1 我比他大三歲 私は彼より三歳年上である
- 2 我比他高三公分 私は彼より三センチ背が高い

「大」も「高」も形容詞ではなく、「大きくなっている（年取っている）」「高くなっている」の意味の状況動詞とみなす。この種の状況動詞はいわゆる形容詞として範疇化されているものである。意思動詞とは違って行為・動作に現象化することはない。ほかにも「値段が高い（貴）」「長い」「多い少ない」「重い」「（気温が）寒い・暖かい」などがある。これらの状況動詞は感情を表す他の状況動詞「うれしい」「悲しい」や「きれいだである」などと違って、その状況がどの程度にまで達しているのか量的にとらえて目に見えるかたちで認知できる。すなわち計測することができる。したがって行為・動作の動量態と同じように目的語として具体的に「三年分の

年をとっている」「三センチ分の高さとなっている（をしている）」という動詞・目的語の構造を形成することができる。そうすると、動量態化できないように見える「悲しい」「悲しむ」という心理状況動詞も「3年間悲しんだ」という言い方が日本語にも中国語にもあるように動量化できるはずである。たとえば、「我去了三年中国（私は3年間中国に行っていた）」のように「我悲哀三年了」という表現は成立することになる。

§ 22 状語の状況態と結果（程度）補語の状況態について—行為動作の動態的認知と静態的認知を考える

- 1 他老穿一個色調的 彼はいつも色物を着る（習慣として）
- 2 他穿着一個色調的 彼は色物を着ている（着ている状態）
- 3 他正在穿一個色調的衣服 彼はいままさに色物の服を着ているところである
(動作の現在進行)
- 4 他高興地穿着一個色調的 彼はうきうきした気分で色物を着ている
(動作の持続)
- 5 他穿一個色調的衣服穿得高興 色物を着てうきうきした気分になっている
- 6 他不應該穿得太老氣（衣服を）着て年寄りくさい状態になってはいけない（着こなしを年寄りくさくしてはいけない）

これらの6つの「穿（着る）」という動詞に動きが感じられるものと感じられないものがある。例1は習慣として「着ること」化してしまい、動きがあるようではない。例2は「着ている」という状態として「もの、こと」化し、まったく動きが感じられない。例3、4は明らかに動きがある。例4、5は「うきうきした気分」という行為主体の心の様態を表しているが、例4の動詞「穿」には動きがあり、話し手には動態的認知が働き、例5の後のほうの「穿」には動きがなく、話し手には静態的認知が働いている。静態的認知とはつまり動詞を名詞化することである。別な言い方をすると、「着る（着ている）」という出来事（イベント）が「着ること（着ていること、着ている様子）」というもの・こと（オブジェクト）化したのである。

例4も例5も概念の段階では、三つの要素「穿」「高興」「一個色調的」の語順は決まっていなくて混然一体のかたちでつまりゲシュタルト的に認知されている。それが例4の場合には先に状況態「高興」が分節して（表現されて）しまったために、動詞「穿」はあくまで動詞としてその対象物（目的語）「一個色調的」を後ろに支配すること（他動性強化）によって、現実味（リアリティ）をもってくる。ところが、例5の場合、動詞「穿」が真っ先に分節する（表現される）と、処置対象物（目的語）は自然とすぐ後ろに来ることになる。では動作主の心の様態（状況態）の「高興」はどうなるのか。もしそのまま続けて「高興」が来て「他穿一個色調的高興」となると、「高興」は動作主の心の状態を表現するのではなく、「一個色調的（色柄物）」が描写対象になってしまい、「色物（柄物）の衣服がうれしい」という意味になる。それを避けるために動詞「穿」が必ず再出現しなければならない。動作主の心の様態を表現する状況態が後出しになったために、再出現せざるをえなくなったときにすでに動詞「穿」には、動きを失った静態的認知が働き、動詞そのものが「着ている様子、着ていること」という意味の静態的状況態化（オブジェ化）してしまったものと考えられる。何の対象物（オブジェ）になったかということである。さらには動詞「穿」は「得」状況動詞（そういう状況を得る、そういう状況になる）を伴うことによって「高興」という状況態を対象目的語にしてはじめてリアリティを取り戻したとも言える。つまり意味機能的には「着ていること（着ている様子）」は「うきう

きした気分」を「得る（そういう状況になる）」という認知作用が働いている。

例6の「穿得太老氣」の動詞「穿」には意思は働いているが、明らかに言えることは全体として（動詞も含めて）静態的な状況態化している。したがって「着こなしが年寄りくさい」という日本語訳があてはまるのである。いずれにしろ「得」は機能的に「ある行為動作の結果あるいは状況を得ている（そうになっている）」という意味の状況態である。

§ 23 連動する二つのイベント（出来事）の差別・状況態化

人間の行為・動作には二つのイベント（出来事）が連続（連動）しておこる場合があるというより、それが普通である。ときには三つのイベントが続く場合もある。それが人間の営為であり、それを認知し言語表現するのがまた人間の営為でもある。

- 1 シャワーをしてから朝食をとる
- 2 テレビを見ながらご飯を食べる
- 3 自転車に乗って学校に行く
- 4 映画を見て涙を流す
- 5 ハンカチを取り出して涙を拭く
- 6 声をかけられてびっくりして立ち止まる
- 7 腹が立って、もう関わりあいたくない
- 8 昼夜を分かつたず面倒を見る
- 9 謙遜して言う
- 10 一人で映画を見に行く（「一人で」もイベントとみなすことに注意）
- 11 母と映画を見に行く（「母と」もイベントとみなすことに注意）

例1と例5の二つの行為・動作は完全に独立し、かつ連続して行われているが、外の例はすべてほとんど同時進行で行われている。特に注意すべきは10と11の例である。例10と11は、それぞれ状況態副詞と状況態前置詞であるが、これもそれぞれ「一人です」という意味の行為・動作イベント、「母とする」という意味の行為・動作イベントとみなす。それは「する」をつけて一般動詞化しただけでも、行為・動作が要素具体的なイベントとして認知されるからである。行為・動作の要素具体的な状況態として認知される点が「就」「也」「都」「特別」（中国語）などの論理関係副詞と大きく違うところである。しかし、それはまた中国語の単語はすべて動詞か名詞であるということが大前提にしているから成立する考え方でもある。つまり「一人で」の中国語「一個人」も「母と」の中国語「跟母親」も一つの行為・動作であるということである。

例1から例11までのように、言語表現された行為・動作は知覚・感覚で認知されるイベントとされないイベント、あるいは両者が混在しているイベントで構成されている。行為主体が話し手の「私」であれば、例1から11まですべて感覚・知覚されているイベントであるが、行為主体が聞き手（あなた）や第三者（かれ、あの人）であれば、例6, 7, 8, 9の「びっくりして」「腹が立って」「関わりあいたくない」「昼夜を分かつたず」「謙遜する」は、話し手の「私」には知覚・感覚で認知されていないか、観念的に認知されたイベント（出来事）である。

さらに連続（連動）する二つの行為・動作はそれぞれ自立しているイベントとして認知される場合と、先に分節したイベントが従属節、後のイベントが主節という主従関係として認知される場合がある。例えば、例2の「テレビを見る」と「ご飯を食べる」は「看着電視吃飯」として（ただし「一辺看电视一辺吃饭」としてとらえると、自立した二つのイベントとなる）、例4の「映画を見る」と「涙を流す」は「電影看得洒泪」としてあるいは「泪洒地看电影」とし

て、例6の「びっくりする」と「立ち止まる」は「吃驚得站住」としてあるいは「吃驚地站住」として、例7の「腹が立つ」と「関わりあいたくない」は「氣得不想理」として、例8の「昼夜を分かつ」と「面倒を見る」は「不分昼夜地照顧」として、例9の「謙遜する」と「言う」は「謙遜地説」として、それぞれ主従関係を構成する。中国語も日本語も従属節が先に分節し後に主節が続く。後に続く主節が最も言いたいこと、表現したいことになる。はじめから最も言いたいこと、表現したいことが主節になるのではない。後に来るから主節になるのである。このことは日本語でも同じである。たとえば、例4の「映画を見て涙を流す」と「涙を流して映画を見る」はゲシュタルト的概念段階では、両者は同じ現象として認知されているが、それが言語表現として分節するときに連動して起こるふたつのイベントの間に焦点差（価値判断による差別化—問題意識の序列化）が生じる。つまり主従関係が生まれ、後出しのイベントが主節になる。

二つのイベントに主従関係が生ずるのは、一つの動作・行為には姿、格好、様態があるものとして認知されるからである。話し手は一つの行為・動作がどのような状態でなされる（なされた、なされている）か、つまり現出する行為・動作のなかにいろいろなあり方（様相、様態）を見て取って（認知して）いるのである。例えば、最も簡単な表現である「速く歩く（快走）」と「歩くのが速い（走得快）」は、「快」（速い）という状況動詞（意味機能的には状況態副詞）で表されるイベントと、「歩く」（走）という行為動詞で表されるイベントの主従関係として認知される。認知の焦点は後置するイベントにある。だから中国語の場合、動作の様態または動作主の心の様態を表すイベント（状況態副詞として表現される）は、従属節にも主節にも位置する。「走得快」（歩く様子、歩き方が速い）の語順で分節すると、後に来る主節がもっとも表現したいことになる。

§24 言語の線条性とイベント（出来事）の時間系列

次に、中国語は言語の線条性とイベント（出来事）の時間的継起性が単純明快に一致するので、連続（連動）する二つのイベントが主従関係として認知される状況態表現（いわゆる状語を導く「地」表現、結果・程度補語を導く「得」表現のこと）における時間系列はどうなっているのか見てみよう。

1 我不由自主地懷念北京

我懷念北京懷念得不由自主

2 他不知疲倦地操勞

他操勞得不知疲倦

3 他不分晝夜地照顧我

他照顧我照顧得不分晝夜

4 我不想理你地生氣

我氣得不想理你

5 他驚喜地發現・・（わくわくした心の状態で発見する）

他發現・・發現得驚喜（発見してわくわくした）

6 他也覺得自己說得傻乎乎的（話して一話す様子一話しぶりが間が抜けたさまになっている）

7 請清楚地寫時間

請把時間寫清楚

他時間寫得清楚

8 他晚來 他來晚

例1の場合、分節した順に意味化していくと、前者は「私は思わず（我知らず）北京が懐かしくなる」、後者は「北京が懐かしくて私の意志によらない状態になっている（我知らずの状態になっている）」となり、日本語で考えてみても、後者は動詞「懐念」とその行為主体の心の様態「不由自主」の時間系列から見ると、それは同時進行というより一体化している。動作主あるいは行為主体の心の様態を表す状況態は動作行為と同時進行あるいは一体化しているときには動詞の前後どちらにも位置することができる。心の状況態でなくても、行為動作の様態そのものであっても、例えば「解放軍戦士筆直地站着（解放軍の兵士が直立不動の姿勢で立っている）」と「解放軍戦士站得筆直的（解放軍兵士の立ち方が直立不動の姿勢である）」のように、動詞「站」と「筆直地（的）」が前後しても成立する。ただし前者の動詞「站」には“動き”が感じられるが、後者にはあるようでいてないという曖昧な動詞に変化している。後者は「筆直」という状態を述べたいのである。

例2の動詞「操勞」と様態「不知疲倦」の時間系列もどちらが前後しても成立する。状語として「不知疲倦」が動詞「操勞」の前に来るとその動詞には“動き”が感じられる。動詞「操勞」が結果（程度）補語の状況態を後置させると、「操勞」には動きが感じられなくなり、「働きぶり、働いている様子」というもの・こと化して認知されている。つまり「働きぶり」が「疲れを知らない状態になっている」という静態の状況態の認知作用が働いているということである。行為・動作とその状況態は、概念の段階では渾然一体的な要素に分解できないゲシュタルト的認知が働いているが、それが分節して言語表現される時に、状況態が後に来るとその行為・動作が本来的に持っている動きのあるイベント（出来事）性が失われ、オブジェクト（もの・こと）化してしまう。つまり静態の状況態としての認知作用が働いていると考えられる。例3の行為・動作「照顧」と状況態「不分昼夜」についても同じことが言える。

しかし、例4の動詞「氣」「生氣」と様態「不想理你」の時間系列は後者の「腹が立っておまえには関わりたくない」が成立するが、前者の「おまえに関わりたくなくて腹が立つ」は成立しないようにみえる。

例5の「発現」と「驚喜」の時間系列もどちらが前後しても成立する。例6の「傻乎乎」は例5の場合と同じように状語として動詞「説」の前に来ると、「間が抜けたさまで話す」という意味になり、やはりどちらが前後しても成立する。

では、語順の可逆か不可逆ということはどういうことであるのか考えてみよう。例4の状語「不想理你地」と動詞「氣」の語順は時間系列上の可逆か不可逆かどちらであろうか。「お前には関わりたくないという心の様態をもって怒っている」という意味で理解すると、この語順も時間系列の可逆か不可逆かに左右されない認知の仕方といえる。しかし、どうしても時系列的に語順を配列しないと理解できない、あるいは話し手にとってもその方が自然に発想されると思われる用例がある。「那個小年輕拍門総拍得要倒下来似地響（あの可愛い若者がドアをたたくと、いつもいまにもドアが倒れそうに響く）（そのたたき方がドアが今にも倒れそうである）」は、逆に「倒れそうに響く」が前に来ると、「響いてからドアをたたく」ことになるので、語順と物理的な時間系列は不可逆になる。要するに、心の様態の場合は時間系列的にはほとんど時差がないから、動詞の前後どちらでも成立するが、物理的な因果関係の場合は時間系列が問題になる。

§ 25 副詞句（状語）を導く「地」、結果・程度補語を導く「得」および連体修飾語を導く「的」

一「地」「得」「的」はde音によって従属節化したことを表現する

一つの動作・行為には姿、かたち（様態）がある。時間的にとらえたのが、いわゆる英語文

法のアスペクト（様相、様態）であり、中国語では具体的に「坐了（座った）」の発生・完了態「了」、「坐着（座っている）」の持続態「着」となる。また様態そのものを表すと「坐好（格好良く座る）」の状況態「好」（漢語文法ではいわゆる結果補語である）となる。とくに状況態を表現できるのが既に前述した多くの状況態副詞、「地」で導かれる漢語文法の状語、および「得」で導かれる結果・程度補語である。これらはすべてひとつの行為・動作がどのような状態でなされる（なされた、なされている）かを表現するものである。つまり現実の人間の行為・動作は抽象的かつ純粋なひとつの動詞だけで表現できないということであり、裏を返せば人間はひとつの現出する行為・動作のなかにいろいろなあり方（様相）を見て取っている（認知している）のである。行為・動作そのものも一つのイベント（出来事）であり、その行為・動作の様態も一つのイベントであり、さらに動作主の心の様態も一つのイベントである。ゲシュタルト的に認知されているイベントが言語表現になって分節するときに文法化され、「地」、「得」、「的」のいずれかが選択される。

1 他不分昼夜地照顾我 彼は昼夜を分けずに（分けないで）面倒見てくれる

不分昼夜的照顾 昼夜を分けない面倒見

2 天气冷得手脚麻木 寒くて手足がしびれそうだ 手足がしびれるくらい寒い

3 我气得都不想理你了 私は怒りでおまえにかかわりたくない

我都不想理你地生气了 私はおまえに関わりたくなくて怒っている

4 他唱得好 歌う結果（歌って）上手になっている 上手に歌う

例2の「冷」は漢語文法では形容詞として扱われるが、ここでは状況動詞とみなす。したがって例1、3と同じ扱いをする。状況態イベントの例1の「不分昼夜」、例2の「手脚麻木」、および例3の「都不想理」はそれぞれ動詞「照顾」、「冷」、「气」の動作・状況がどのような状態で作られたか（なされているか）を修飾する。「照顾」が「面倒見」という抽象名詞となったとき、「不分昼夜」は「照顾」に副次的かつ従属的な連体修飾語として「的（de）」で導かれ、「不分昼夜的照顾」となり、それは「照顾」の中身（有様、様相）を描写している。日本語では「（昼夜を）分けない」という終止・連体形にすると連体修飾語になり、「（昼夜を）分けないで、分けずに」のように連用接辞（助詞）の「で」や「に」をつけると連用修飾語（状語—状況態副詞）になる。

「地」も「的」もその機能は本来的に同じであると考えられる。現代中国語がその弁別性のゆえに、話し手の認知のなかで「照顾」が名詞の時には「的」を、「照顾」が動詞の時には「地」を取るようにしただけである。これらの「地」「的」は、動詞あるいは名詞を支配できないが、動詞あるいは名詞を修飾（描写）することができる状況態を導くための働きをする。

また「地」は、もうひとつの「得（de）」と形態機能的に同じような働きをする。例3の第一次動詞「（生）气」と状況態「都不想理」の二つの要素は分節する前段階、つまり概念の段階ではゲシュタルト的に（構成要素に分解できない直観として）認知されている。それが分節するときになってはじめて語順が決まる。知覚認識動詞の「气」が先行すると、それは、後出しになったイベント（出来事）「都不想理」に連動する従属的（副次的）なイベント（出来事）になる。そして後出しになったイベントが主節として焦点化されるときに、「（生）气」が従属的（副次的）イベント化あるいは静態的な状況態化したことを明示するのが「de」音である。逆に「都不想理」が先行すると、後出しになった動詞「（生）气」に連動する従属的イベントになり、従属的イベントであることを示すのが「de」音である。要するに、「地」「的」「得」は「de」音によって従属的（副次的）イベントを導くと言える。

明示性の強い状況動詞「得」を接辞するのは、もともと主要（第一次）動詞「气」が他のど

んな要素よりも強い統語力をもって認知されているからである。それが副次的イベントになっても統語力を維持しようとして、「得」は後ろに分節される状況態を目的語（対象オブジェ）化していると考えられる。「把」話題・処置態文において、統語する目的語を失ったときにも同じような認知作用が働き、自分の統語力を保持しようとして文末に「了」や「一下」「同一動詞の重ね」を補うのに似ている。

これに対して、「不想理」は、もともと主要（第一次）動詞「(生)気」にたいして副次的に認知され、強い統語力をもたないので、従属節を導く同じ「de」音であっても、「得」よりも明示性の弱い接辞「地」で導かれることになる。現代漢語では、両者の意味機能を区別するために「得」と「地」に書き分けている。

例4の「唱」と「好」の連動するイベント関係においても「得」は同じ意味機能を持っている。従属的（副次的）イベントは「・・・して（で）」という日本語の意味があてはまる。

では、たとえもし「地」あるいは「得」がないとしても、たとえば「我気、不想理你」または「我不想理你、気」として、ふたつのイベントはゲシュタルト的に概念化されている。つまり分節するとき自立・対等の関係にある複文として成立する。それが観照論理態として認知されると、「私は怒っているのだからおまえには関わりあいたくない」、あるいは「私はおまえに関わりあいたくない、というのは怒っているからである」となる。いずれも中国語では「因為」という観照論理態の因果態で表現される。

しかし、「我(生)気」と「不想理你」というふたつのイベント（出来事）が順不同つまり可逆か不可逆かを問わず、行為・動作とその状況態の連動関係として認知されると、そこに主従関係が生ずる。知覚認識動詞「(生)気」が先行して分節すると、その行為・動作は他動性の強い状況動詞「得」によって従属的（副次的）イベント化あるいは静態的オブジェ化したことを明示する。日本語では「怒りで（怒って）あなたには関わりあいたくない」という意味になる。逆に状況態副詞句の「不想理你」そのものが先行して分節すると、その状況態は他動性の弱い、軽い意味機能の接辞「地」によって、従属的イベント化したことを明示する。日本語では「あなたに関わりあいたくなくて怒る」という意味になる。

他動性の弱い接辞「地」は、場（ところ）を意味する名詞「地」ではなく、連動する従属節化したことを意味する動詞「而（・・・して、そして）」から発生したものと考えられる。動詞の従属節化を明示する「得」ももともとは「而」であったのでないか。音が「de」に発音されるようになり、「的」音があてはめられた。「的」はもともと名詞の「底」と書かれていたが、連体修飾語という従属節を導く働きをもっていたため、連動する行為・動作あるいは状況態を従属節として導く時にも、同音の「的」が応用された（通音した一音による文法化）と考えられる。